

吉永小百合さんへの手紙

表題は昨日のレポートの最後に紹介した小川榮太郎という文芸評論家が『正論』3月号に寄稿したものだ。立ち読みでもするかと本屋に行ったが、意外と長いので買ってしまった。産経新聞社から発行されている『正論』なる雑誌を初めて買った。表紙からして、なんだか凄い。櫻井よしこ・西尾幹二ら名うての右派論客？が名を連ねる。これぐらいにして、「手紙」に移ろう。



筆者の小川榮太郎は1967年生まれ、埼玉大大学院修士修了とある。名誉教授の佐々木三千子の「愛弟子」のようだ。そのせいか歴史的仮名遣いなるもので、「手紙」は書かれている。小川は『約束の日』という「安倍晋三礼賛本」を書いたことでも知られている。「手紙」は吉永さんの映画解説？から始まる。「キューポラのある町」「伊豆の踊り子」、そして急に最近の「ふしぎな岬の物語」に行く。「この映画が描いてゐる美しい日本を破壊するイデオロギーを内包してしまつてゐる。」(本文通り、以下同じ)と批判する。ここからも、小川の独特の考えが垣間見える。

吉永さんの原爆詩朗読に話が移る。一原爆の「記録」ではなく、貴女が原爆の「表現」の伝道者になつた時、政治の魔手がそこに付け入ります。貴女は、無力な者の声、一方的に傷つけられた者の声の伝達者である事を通じて、寧ろ、さうした無力さを政治的に利用する者によつて、政治的な「強者」の立場を演じさせられ始めます。



話は「手紙」で最も言いたいと思われる「安保法制反対」の大合唱に。まずは、渡辺謙さん、笑福亭鶴瓶さん、樹木希林さん、竹下景子さんを批判する。そのあとで吉永さんへの「いわれなき誹謗と中傷」が続く。

一あへて吉永さんに問ひたい、法案の意味や中身を知らずに、後から責任の取れないやうな出鱈目な批判をする事、またさういふ人達の先頭に立つて広告塔になる事は、貴女の女優としてのあり方や人としての信条に照らして、恥づかしい事ではないのですか。「平和」を大切にする事と、知りもしない法案に大声で反対する事を混同しながら政治に利用されてゆく、貴方を始めとする映画人や芸能人達は、正に「無知蒙昧」そのものではないでせうか。誰の広告塔か？驚くべき事に、日本共産党の広告塔です。

ここまで書いてきて、書くのが嫌になった。根拠も示さずに、吉永さんが法案の中身を知らないと決めつける。広告塔の件では、「しんぶん赤旗」の登場回数を根拠にする。どう考えても理解に苦しむ。この「手紙」は吉永さんの言論を封じる「脅迫」とも言える。これは吉永さんだけでなく、「アベ政治を許さない」と声を上げる人たちへのタチの悪い一種の「脅迫文」だ。許せない。(2016年2月19日)